慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小牧宗司氏を悼む
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1977
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.14 (1977.) ,p.357- 358
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助先生退職記念論集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000014-0357

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小牧宗司氏を悼む

斯道文庫員は比較的年齢が若く、退職された先生方も御健康で、創立以来十有余年間幸に直接関係者の訃音を聞くことはなかった。しかるに今春元文庫長佐藤信彦先生逝き、十一月下澣大分県国東半島に三浦梅園の稿本手沢本類の調査出張中文庫賛助員会委員長塩山豊蔵氏の訃報に接し、十二月に入って帰京文庫に出るや小牧さんが亡くなりましたよと告げられた。こうしてにわかに御三方への哀悼の辞を続け草して本誌に掲げねばならぬとは思いもよらぬことで、昨日の如く思える文庫の廿年の歳月が今更の如く回顧され、若い若いと思っていた私共もそれだけ老境に進みつつあり、感慨雲聚して悼喪惘々たるものがある。

本文庫の元用務員小牧宗司氏は明治四十年川越市に生れ、昭和二十一年高輪白金にあった藤山工業図書館の用務員として本塾に就職、三十三年同館が廃されて工学部に移る時、丁度麻生氏から寄贈された蔵書を日吉の旧寄宿舎南寮を利用して受け入れることになり、小牧さんは文庫に転属して文庫内に住み込むこととなった。私は九州大学に寄託してあった蔵書の受け取りと梱包輸送の為め二月末から福岡に一ケ月余出張し、その間小牧さんは日吉で受け入れの準備に携った。四月初蔵書が到着してから、約五年間小牧さんは文字通り昼夜蔵書と起居を共にし、文庫が三十七年秋三田に移ってからは通勤となり、四十八年三月末定年で退職するまで、小牧さん小牧さんと親まれて文庫に勤務された。文庫に正式に設立される前の準備期間の最初から一貫して在職したのは小牧さんと私の二人である。

小牧さんは決して頑健ではなく、些少足が悪く、引きずるように歩き、動作は寧ろ遅滞がちであった。しかしその

温順誠実はそれを補って餘りあり、よくつとめて私共の面倒を見て下さった。独身で身よりも殆ど聞かず、淋し気ではあったが、陰気ではなく、若い者ともよく交って酒が入るとはしゃいだ。文庫にとって忘れられない小牧さんの功績は、和唐装本の万巻の蔵書の一つ一つを、夾板の板をボール紙で作製した文庫特有のボール紙帙で装備し、また線装の糸のほつれを丁寧に綴じ直してくれたことである。文庫の古書の大部分は小牧さんの愛護の手を経ている。定年近くなるにつれて健康が衰え、特に夏になると食欲不振と自炊の煩わしさとが因となり果となり相い加乗して衰弱が目立った。小牧さんは定年を待ち構えるようにして去って、出不精のせいかその後文庫には姿を見せなかった。鰥夫孤独の小牧さんの健康を秘かに私共は案じていた。小牧さんはどうしているだろうとは時々文庫の中で話題になった。退職後二、三年たってから文庫の一人がアパートを訪ねたが、既に転居して行き先が不明ということであった。そして突然、十一月廿日享年七十歳を以て横浜市港南区下永谷の特別養護老人ホーム芙蓉園に於て歿せられたという報せが歿後に塾の方にあった。文庫の誰もが気にしていながらお見舞もできず、告別式にも弔し得なかった。老後を慰める打つ手は幾らもあったにと悔んでも追いつかない。文庫の古書を手にしその紙帙を解く毎に、歩くのが苦手であった小牧さんが、老眼鏡をすり上げながら本をいとおしむ如く机にうずくまってじっと作業をしていた姿を、私共は決して忘れ得ぬであろう。

阿部隆一謹識